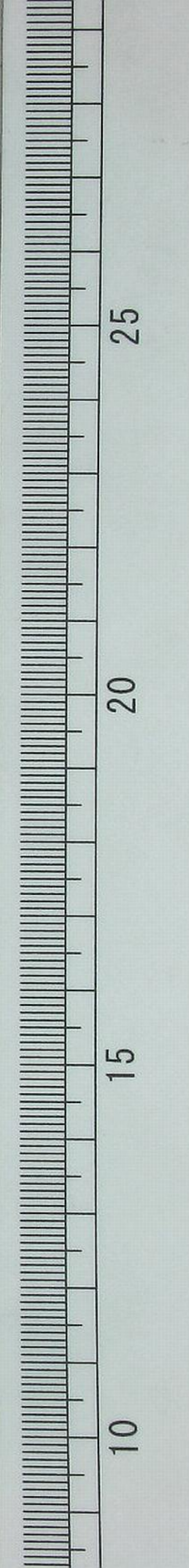




切刃の
噂の
聞於
書き竹

島鮮堂壽梓

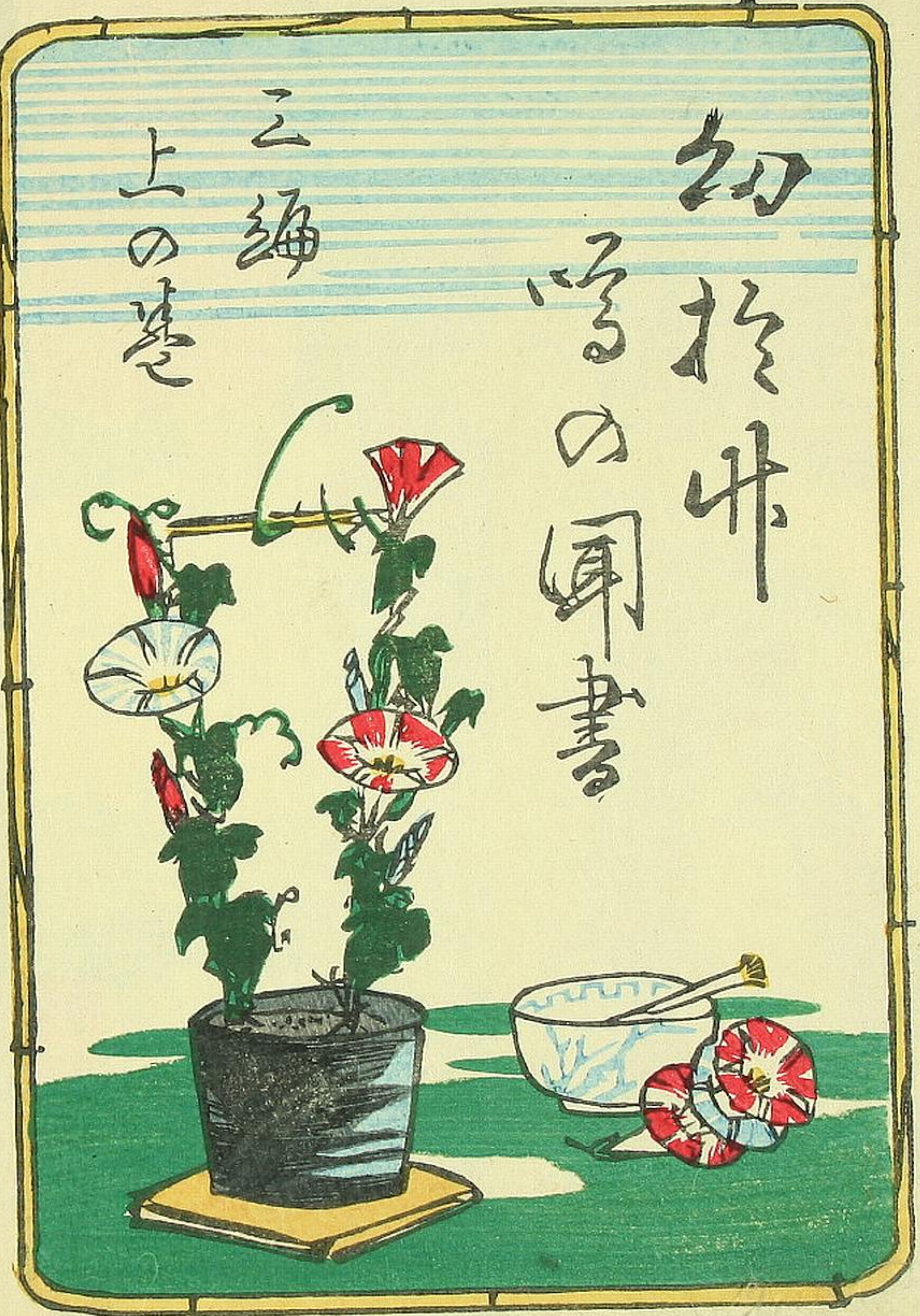
三編上



初於竹

竹の園書

三編
上の巻

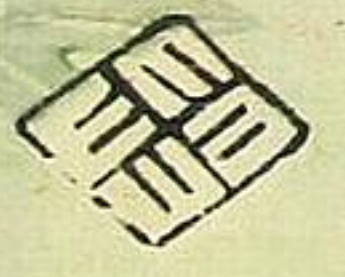


<48-8368>

今更めてつるも申訳の似られどお竹の履歴成就して種々の
 樽の何りて何處を真と定め難き彼の幻の跡も如き
 聞が俤小書綴りて初めより腹稿を定めて掛りたるね
 追々枝葉を増して緑の林を為す長物語と委く記さん
 かの中々約束の三編の纏らぬと恐るは只お竹が節立一大き
 所をツンド短く切詰て漸く首尾を全うせしものをればや
 やく月を舎せし叢竹の梢枯のある様思を所も何んか
 限ある葉敷思のわあを迷ふ由る次第を一寸断つてこれ
 と起泉子が頼むの口上を其終序詞と為す

明治十四年五月

芳川春清



可竹三上



○**行末の末八宿**
 ありあけす
 魚迄



▲**業のりんが**
 鬼の南にお淋に
 一宿をたぐりんと
 お淋と云浦さ
 鳴を同れせし
 とくあふ白影と

△**先年と浦**
 ありあけす
 魚迄
 ありあけす
 魚迄

◇**是の若**
 初は次お淋の
 今更の仔細は
 ありあけす
 魚迄
 ありあけす
 魚迄

いど松をが上の様
 すと若(百小令)
 お淋(百小令)
 ありあけす
 魚迄
 ありあけす
 魚迄



◇**是の若**
 初は次お淋の
 今更の仔細は
 ありあけす
 魚迄
 ありあけす
 魚迄

ありあけす
 魚迄
 ありあけす
 魚迄

つぎ 借し合をて
 御朱の敷を素羅一
 作へ知しぬ老徳三
 氣と心わし相へ
 ら進が双方の申し
 立不疑うしきるも
 あい何れがぶらうも
 からひと徳と弁
 が不持たる心出い
 合く御物と徳り
 うはせ証出と松系
 せし松吉との心
 と称し出せとの



はと
 百五十四と編ら
 列登自らか逆編
 多に値三希由書感
 代々の武まハ承継せよ

はと
 知りぬとの味
 代芳と行あり知
 女と梅り守と
 云んてお休と傳
 仍ん面老ああり
 と進し承格ら色一
 不味お解儀
 き武ま折入て
 歳ら肉海



大金と
 海一と
 松吉の抱
 その御よ

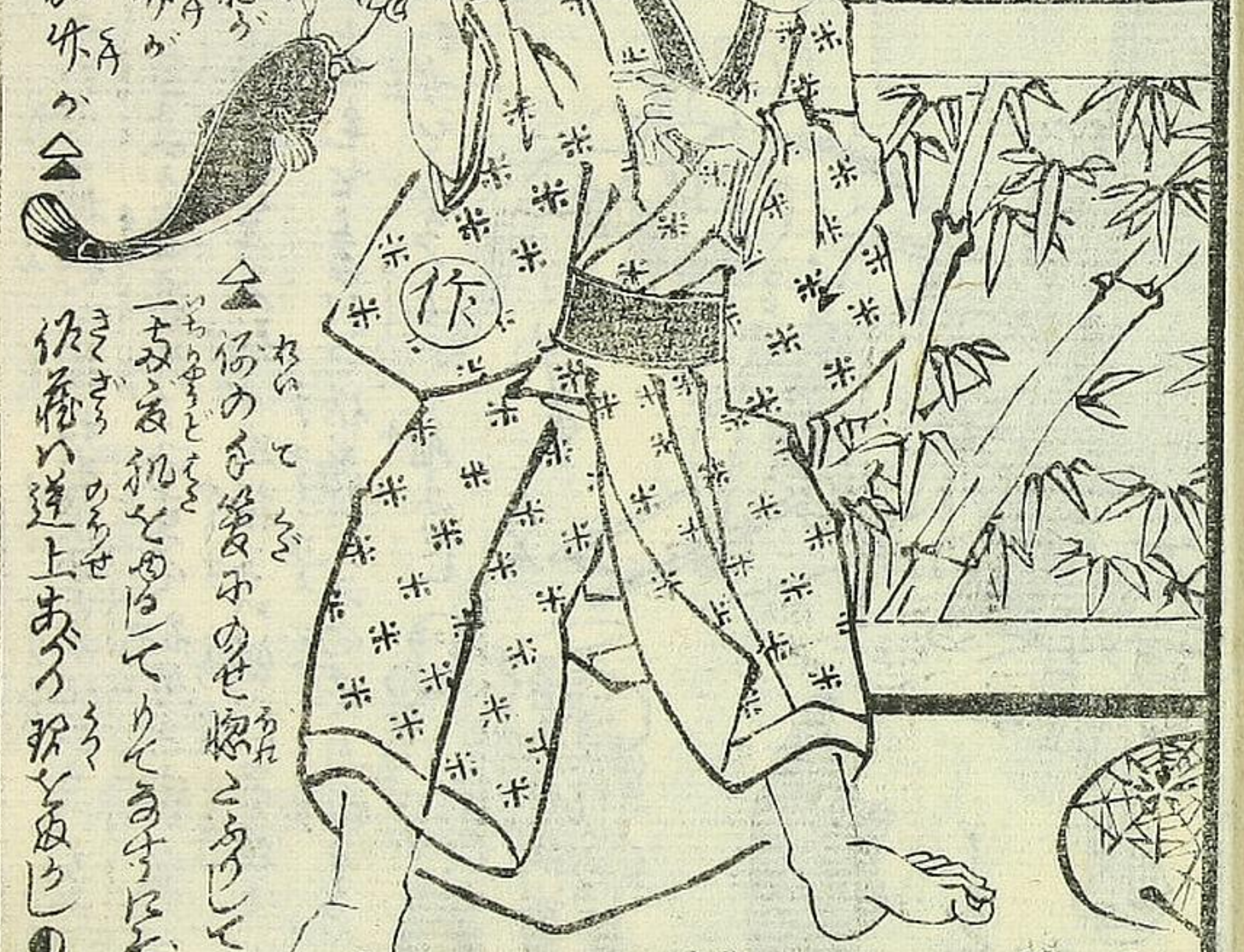
合子
 唐世
 承以
 1と
 形は
 如表
 由老
 協和
 示後
 松吉
 との

ついでに一人と位せしむるも、
 けしきに似て、
 自らと芳名の、
 ありたれど、
 小出、
 附合、
 お休、
 ひと、
 奴、
 不

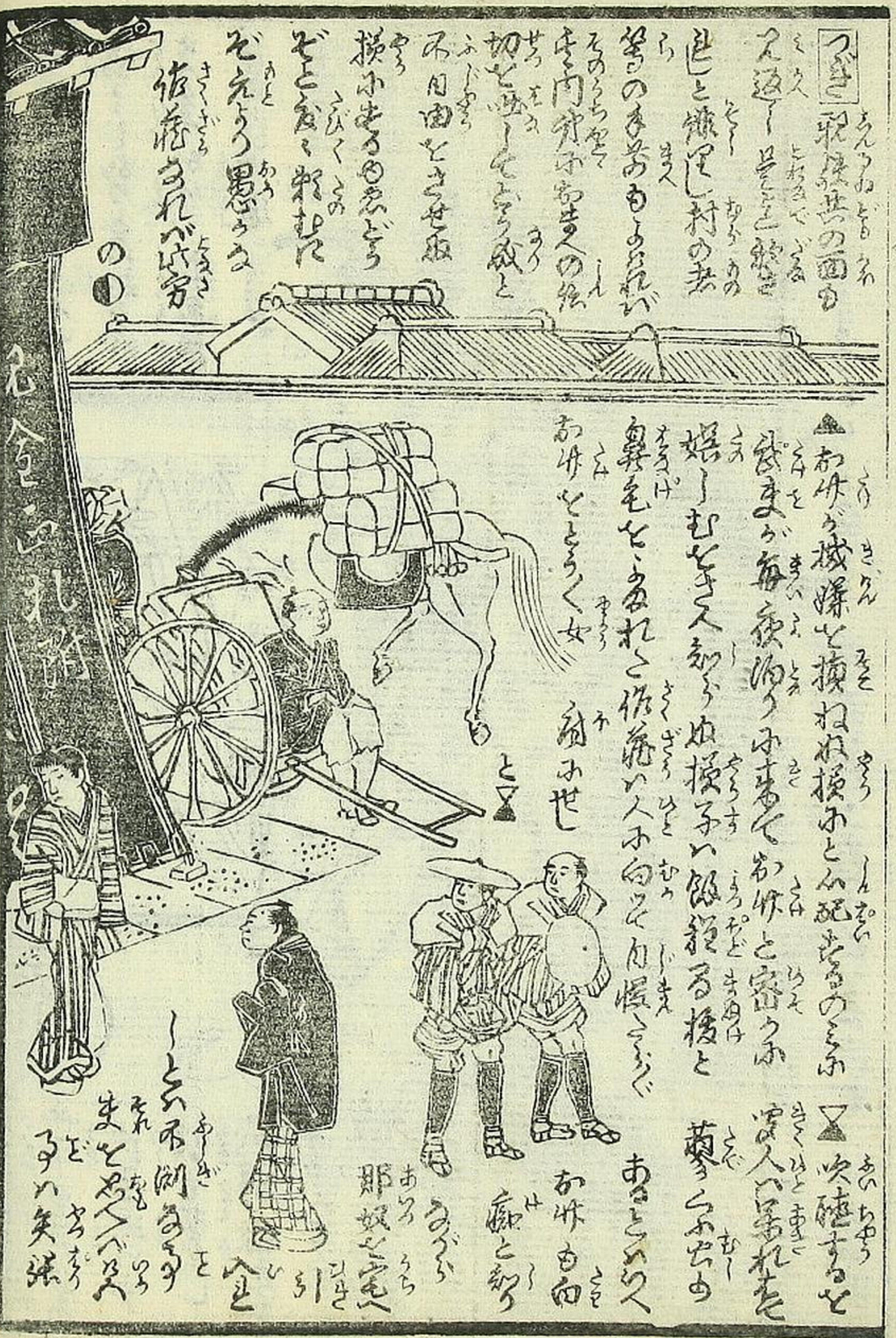


○竹の、
 て、
 せ、
 の、
 換、
 白、
 小、
 内、
 念、
 作、

と、
 婿、
 先、
 小、
 ひ、
 代、
 祝、
 せ、
 拵、
 の、
 け、
 芳、
 件、

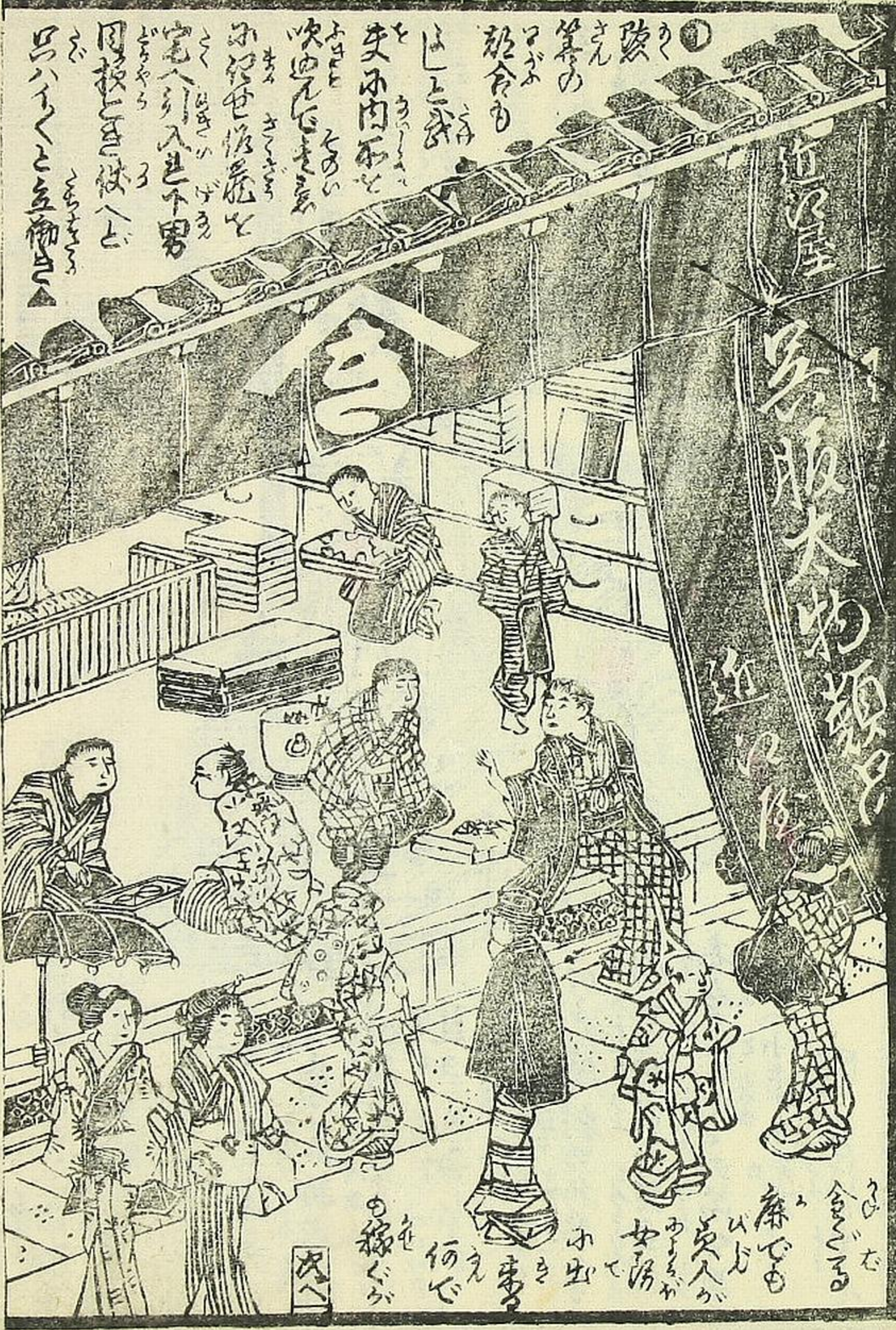


い、
 ぬ、
 ぬ、
 拭、
 拵、
 の、
 縁、
 一、
 と、
 一、
 一、



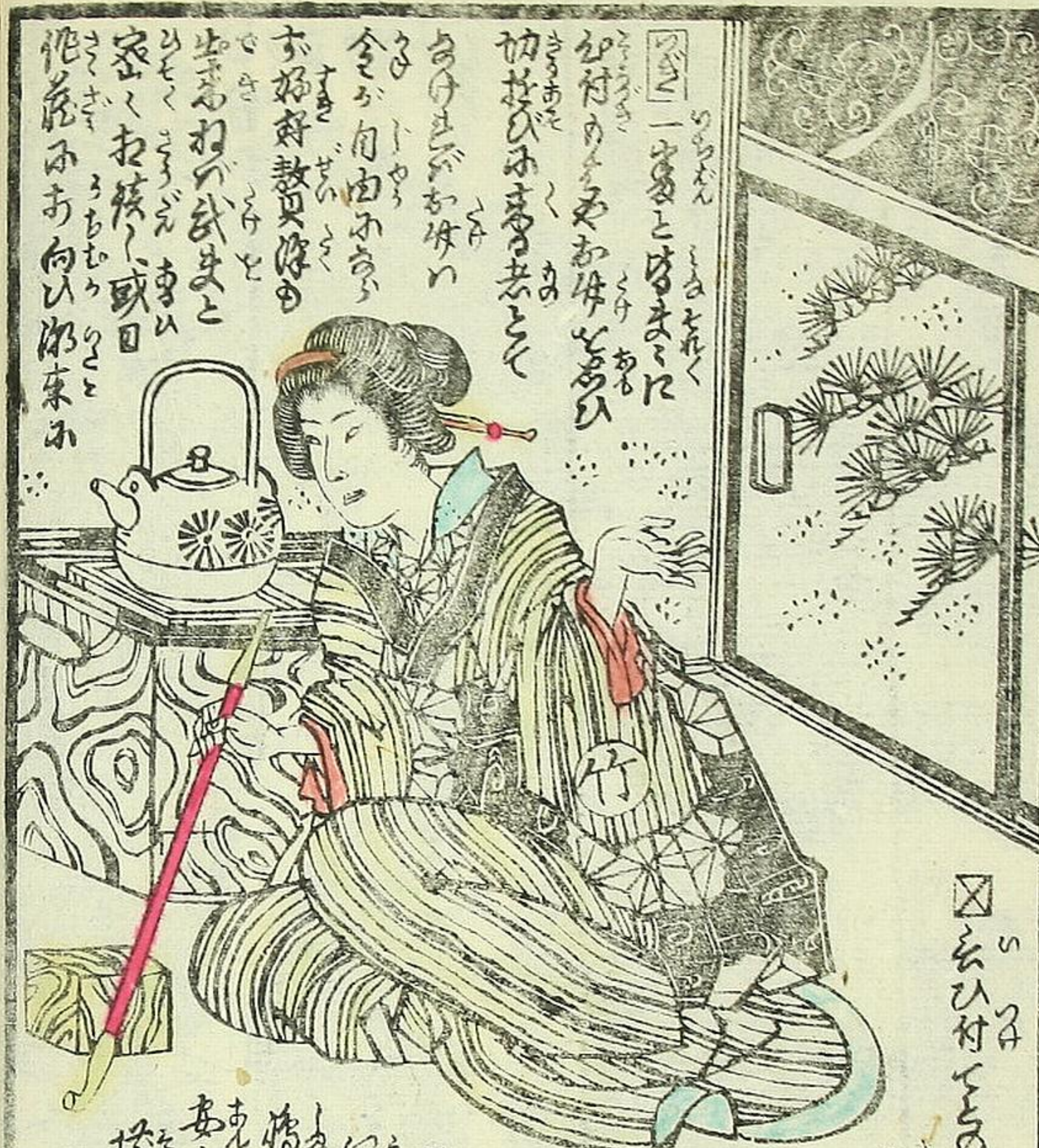
つぎ 取は其の面
久遠い 是れは
世と兼て村の若
等のもあもよるれい
そのうちあも
その内あもあまの
切とていさう成と
不自由とさせぬ
横小走るのもた
どとさうおぼ
そえさう思ひ
佐藤さればは
お外を城の横と換ね換れ
此の世の
お外を城の横と換ね換れ
此の世の

お外を城の横と換ね換れ
此の世の
お外を城の横と換ね換れ
此の世の
お外を城の横と換ね換れ
此の世の
お外を城の横と換ね換れ
此の世の



倉
道屋
鳥版大物類
運石

倉
道屋
鳥版大物類
運石
何心
お外を城の横と換ね換れ
此の世の



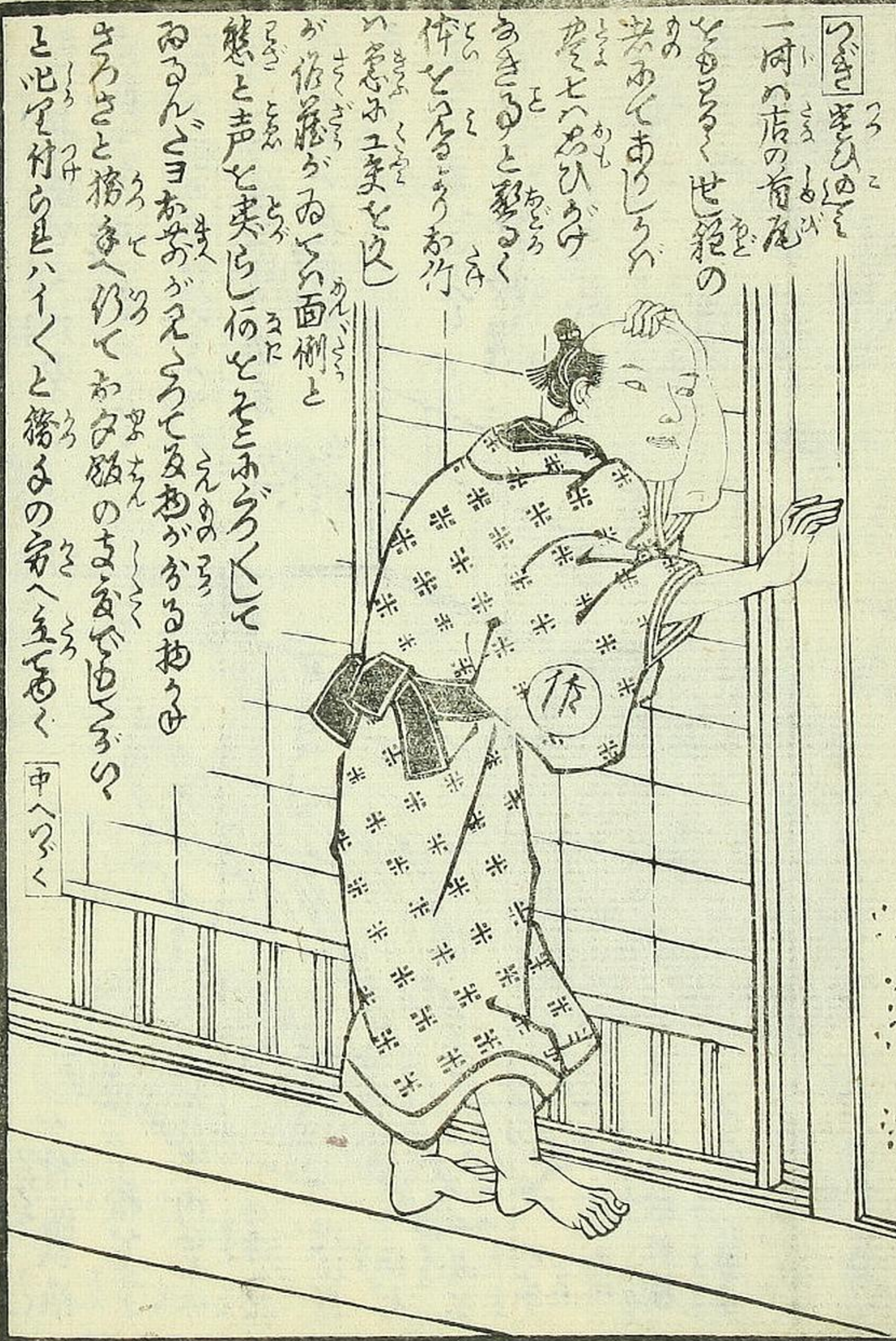
一室とばまに
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ
 初村のよきお母とよひ

あひつり
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と
 影と小オット水知と



おる私が娘と今なある
 友貞さんの雨へ喜ぶあはる
 の七千田の支度金ぐり
 ちかあつての通り船来
 あいあいの呉の振屋が
 あいあいの呉の振屋が
 あいあいの呉の振屋が
 あいあいの呉の振屋が
 あいあいの呉の振屋が
 あいあいの呉の振屋が
 あいあいの呉の振屋が
 あいあいの呉の振屋が
 あいあいの呉の振屋が

か付流ひ
 七へお味
 七へお味
 七へお味
 七へお味
 七へお味
 七へお味
 七へお味
 七へお味
 七へお味
 七へお味
 七へお味



命之養生善惡鏡 折本 一冊 教訓善惡図解 折本 一冊

清譽 名所 五十二餘 折本 一冊 志 折本 一冊

徳川年代鑑 折本 一冊 大功記銘傳 折本 八冊

日本 名所 神社佛閣 折本 一冊 園とぶく 折本 一冊

俳優忠臣藏 折本 一冊 色入小本 折本 一冊

色圖 繪入 單語圖解 折本 一冊 魔島紀事 折本 一冊

龜 地本 問屋 島鮮堂 瀬島龜吉

淺草區瓦町十二番地



まがら

おはら

のま

かき

ら海

中の巻

尾高文庫



上の巻

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはら

おはらのササレ子
 振取きの人々を振まればおの
 江戸橋村の振作と

おはら

おはら

おはらのササレ子
 振取きの人々を振まればおの
 江戸橋村の振作と

おはらのササレ子
 振取きの人々を振まればおの
 江戸橋村の振作と

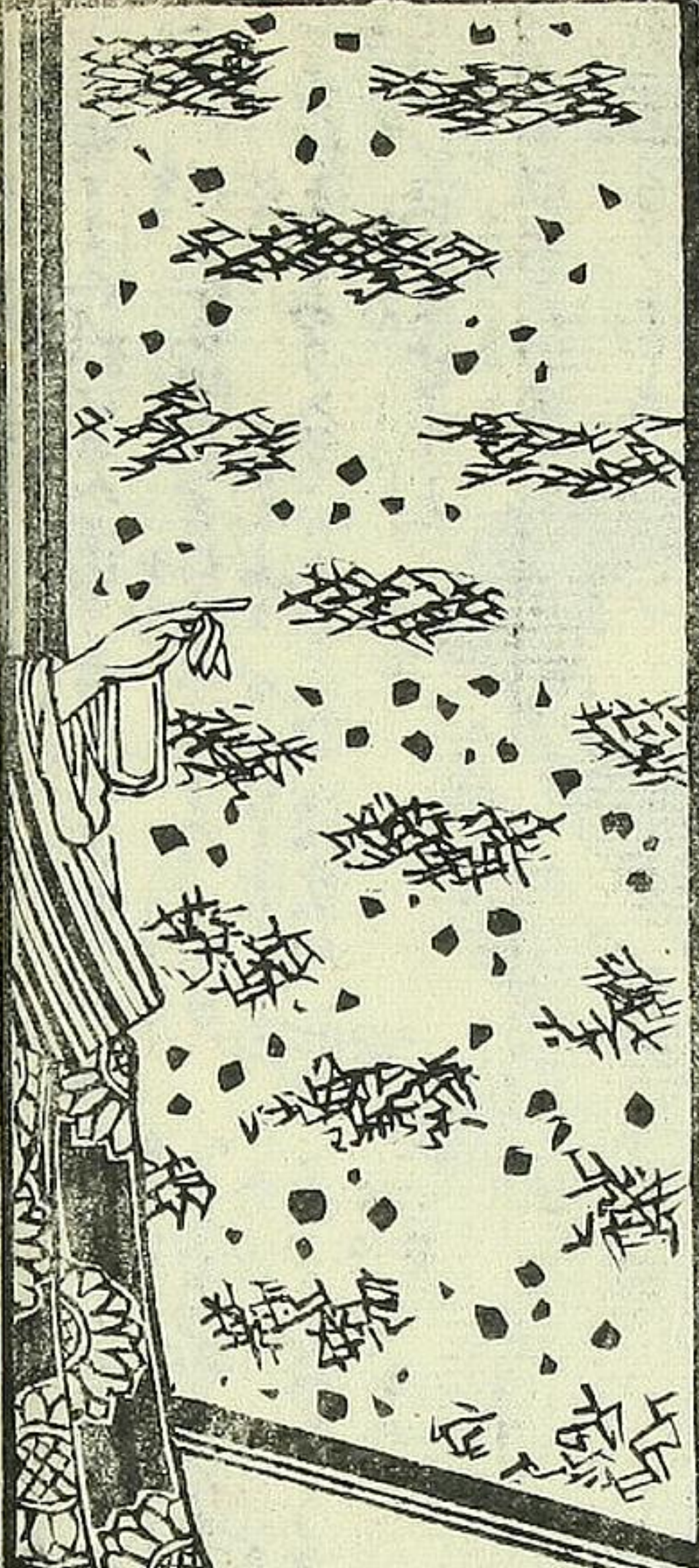
おはらのササレ子
 振取きの人々を振まればおの
 江戸橋村の振作と

おはら

お殿様おはせませう
 此の御前よりあるは 那奴の
 困ひ者ありてもあるは 如何に
 子に様つてもおはせませうとの
 御前様の御前より

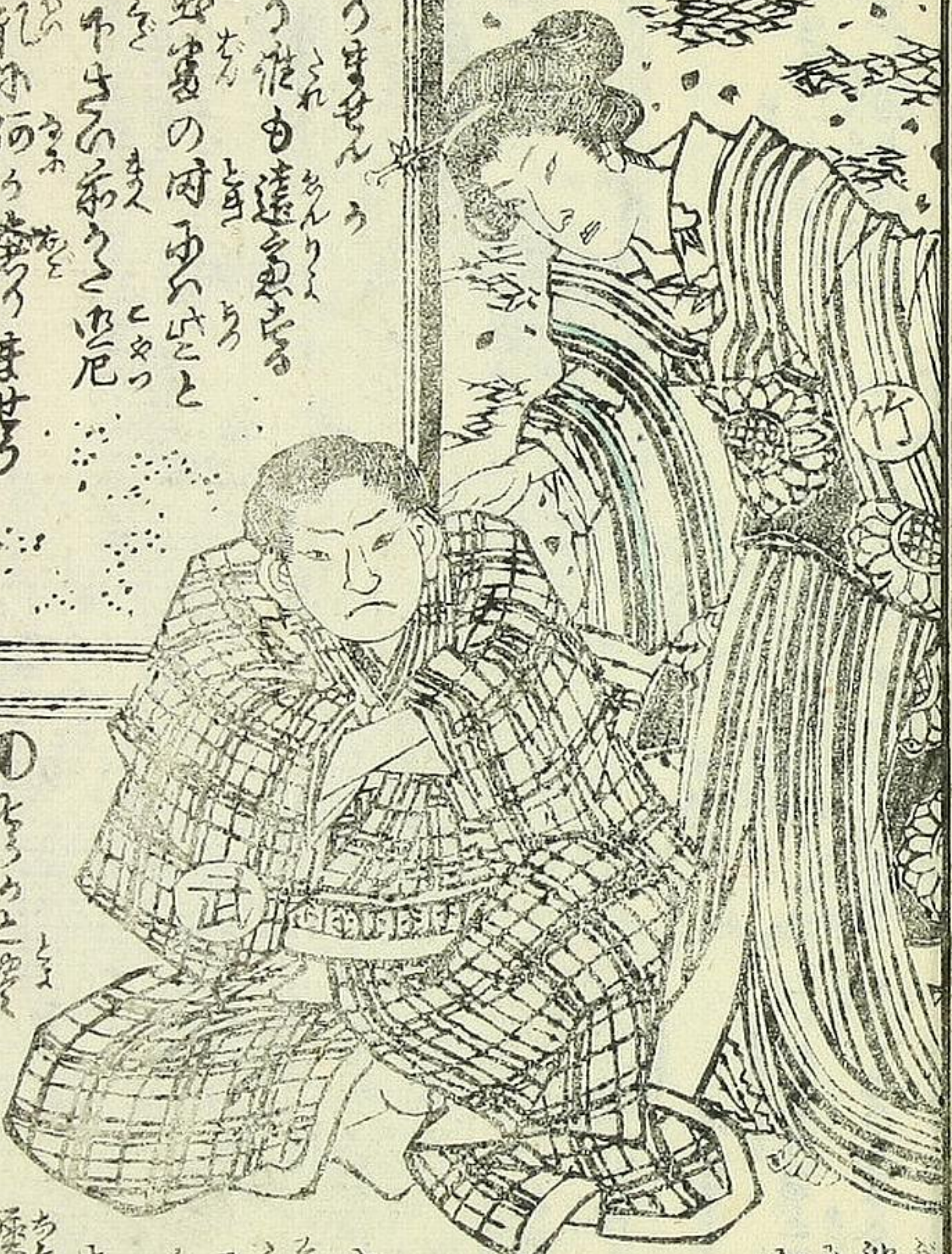


甘酒
 内には
 末合
 たと



俄に夜敷を
 燈ひながら
 夫の御前を
 閑休那の是れと
 ありて兄方に達し
 お休が夜敷を
 手取りに持て
 兄惚る更郵使と
 面はし虫状の御末
 うら兼て原文を
 一おの
 外に宿
 端と南

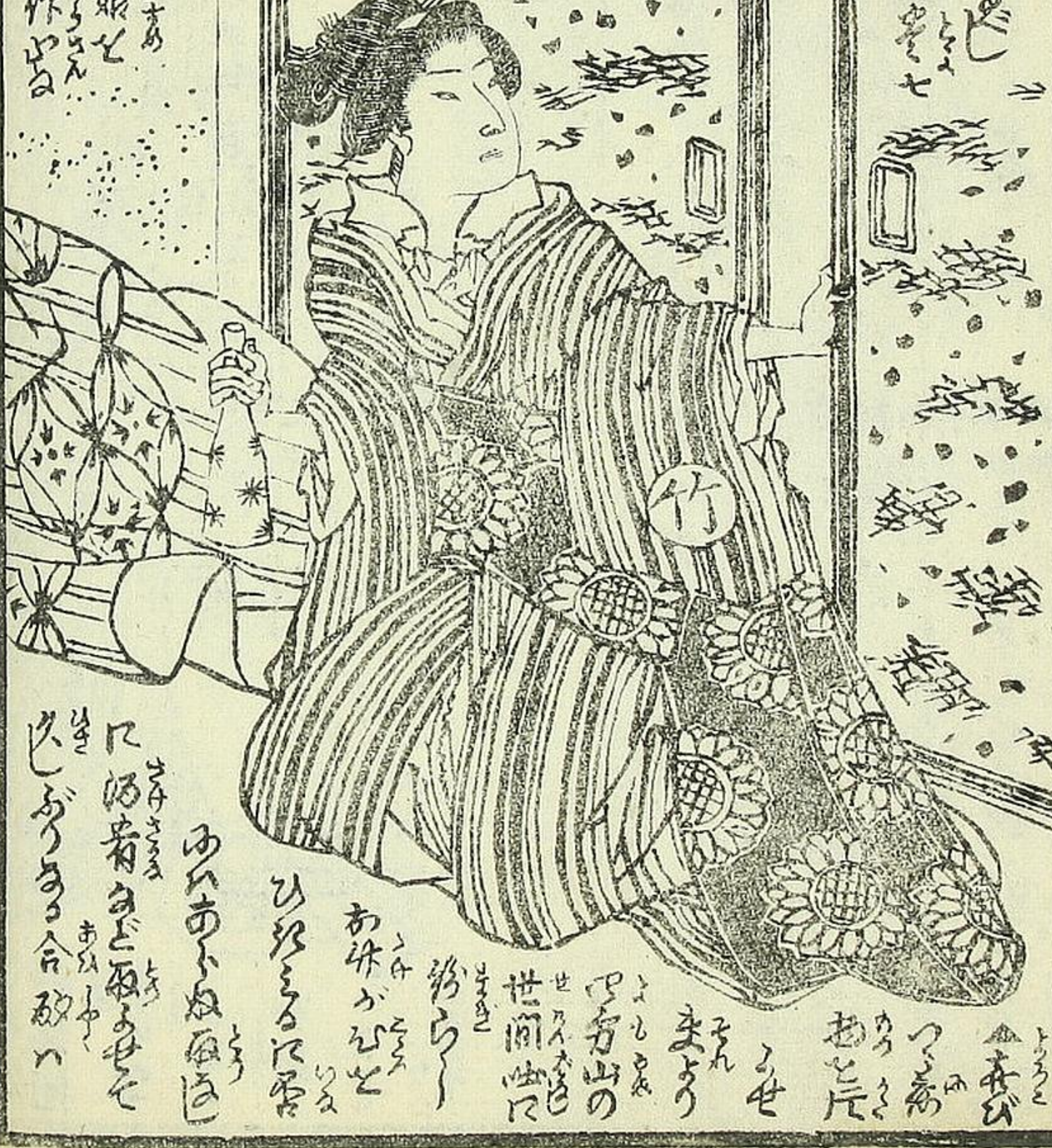
お殿様おはせませう
 此の御前よりあるは 那奴の
 困ひ者ありてもあるは 如何に
 子に様つてもおはせませうとの
 御前様の御前より



お殿様おはせませう
 此の御前よりあるは 那奴の
 困ひ者ありてもあるは 如何に
 子に様つてもおはせませうとの
 御前様の御前より

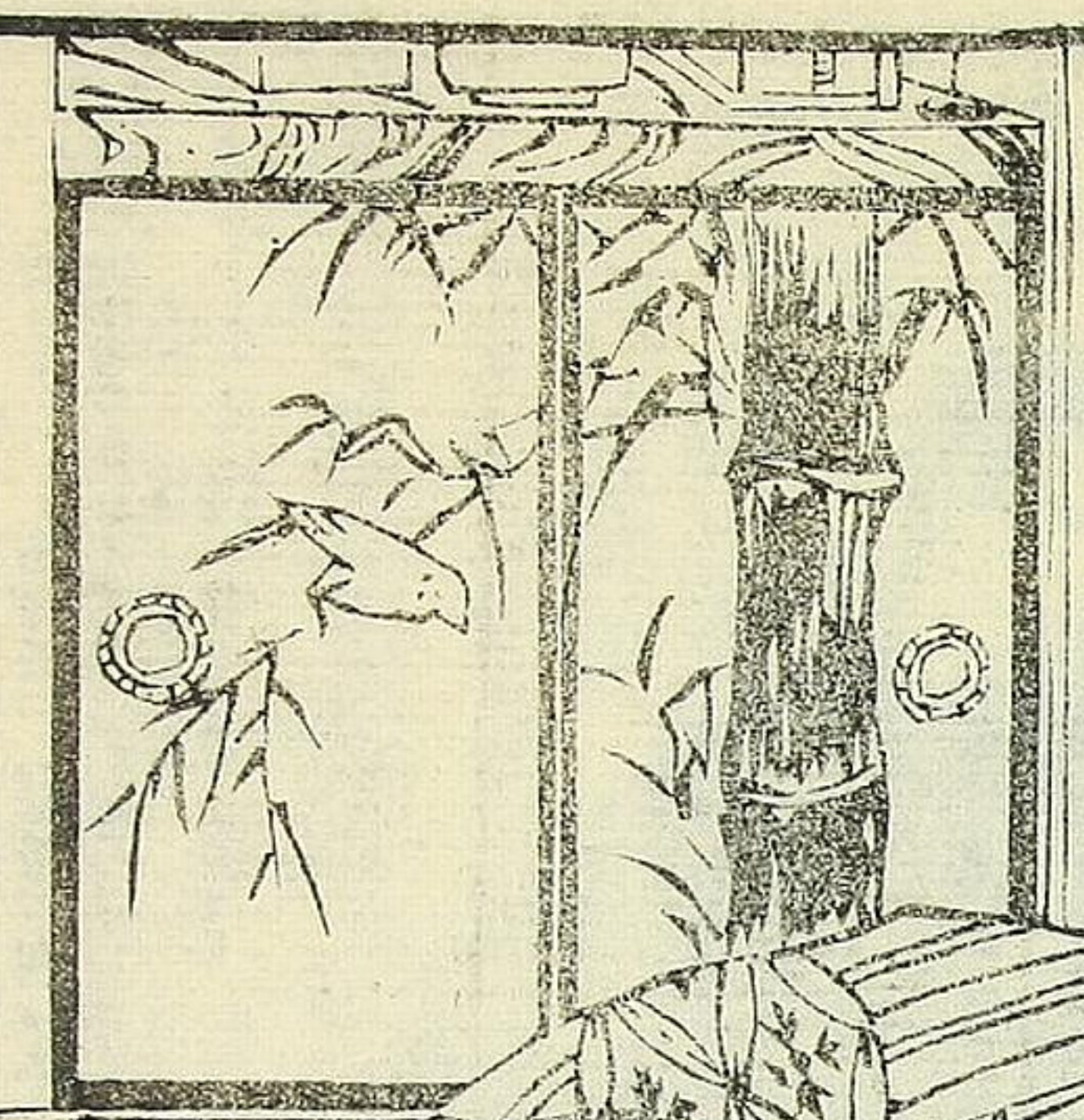
ついでとて侍て奉る也
 の文面おけい之を考て
 江戸せわ

ついでとて侍て奉る也
 の文面おけい之を考て
 江戸せわ



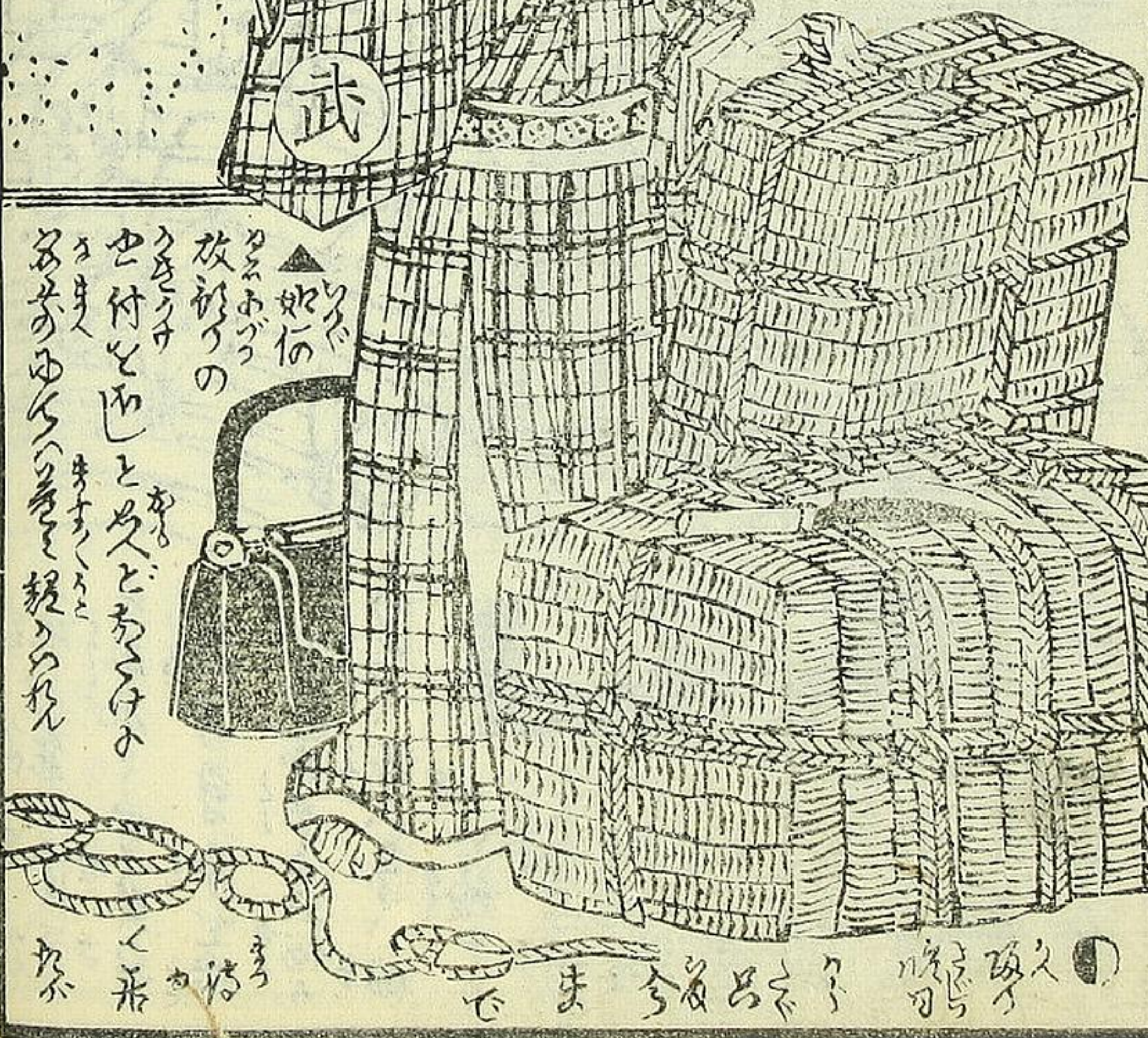
あつたぬぬぬ
 江戸せわ
 世間世
 竹
 江戸せわ
 世間世

支度とあると物やくと
 武家と二人の侍者と
 志んねへ響てい世
 か休ああいのさあ
 らの利巻が返るる



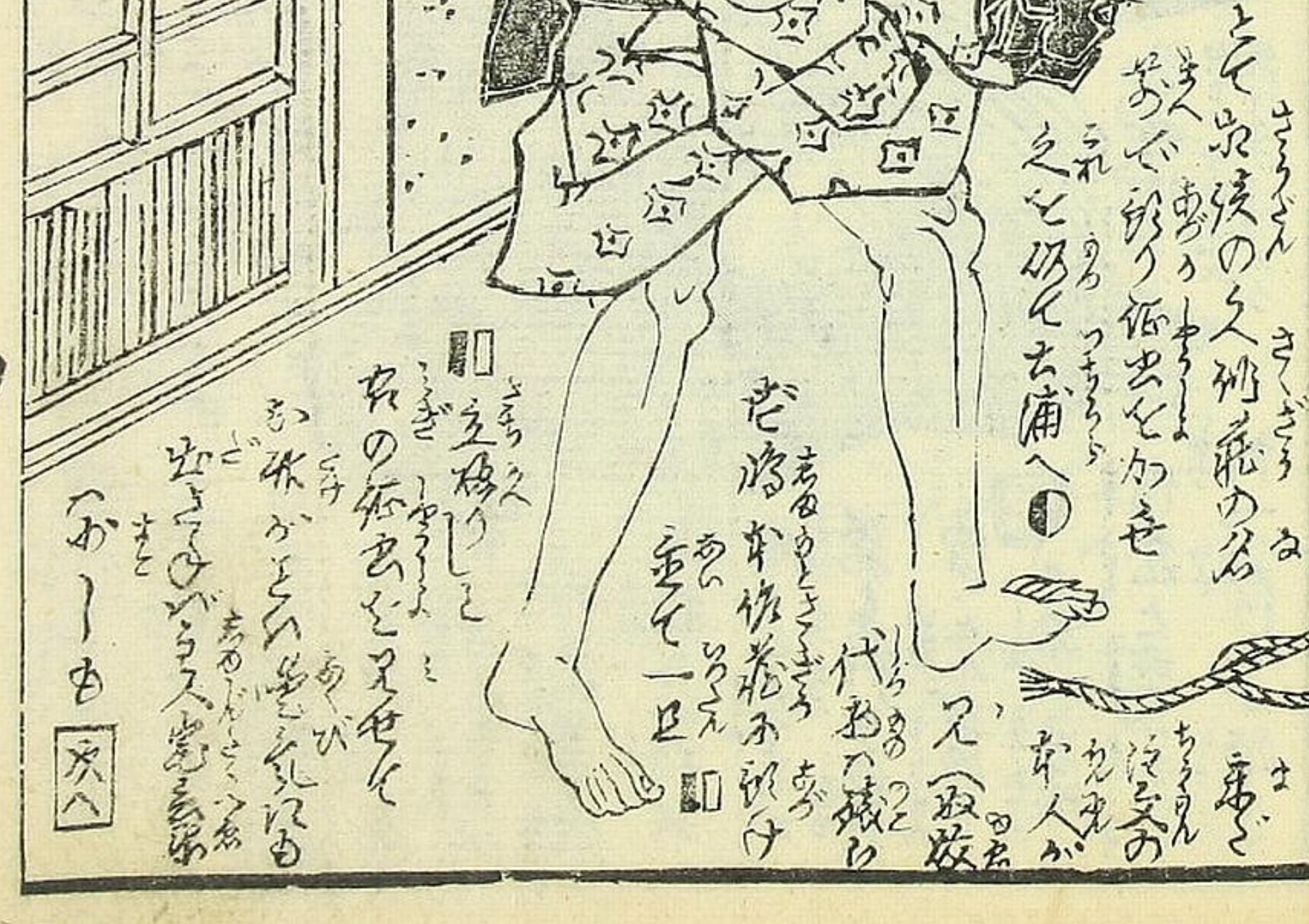
お休が来るてに
 とぬぬ一は女
 志んねへ響てい世
 か休ああいのさあ
 らの利巻が返るる

客の來ぬ暇に、主人の御前へ
 のまると又の酒肴と申すに、
 お味も宜しきと申す。此の酒肴は
 此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、



此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、

此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、



此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、
 此の酒肴を、此の酒肴にして、

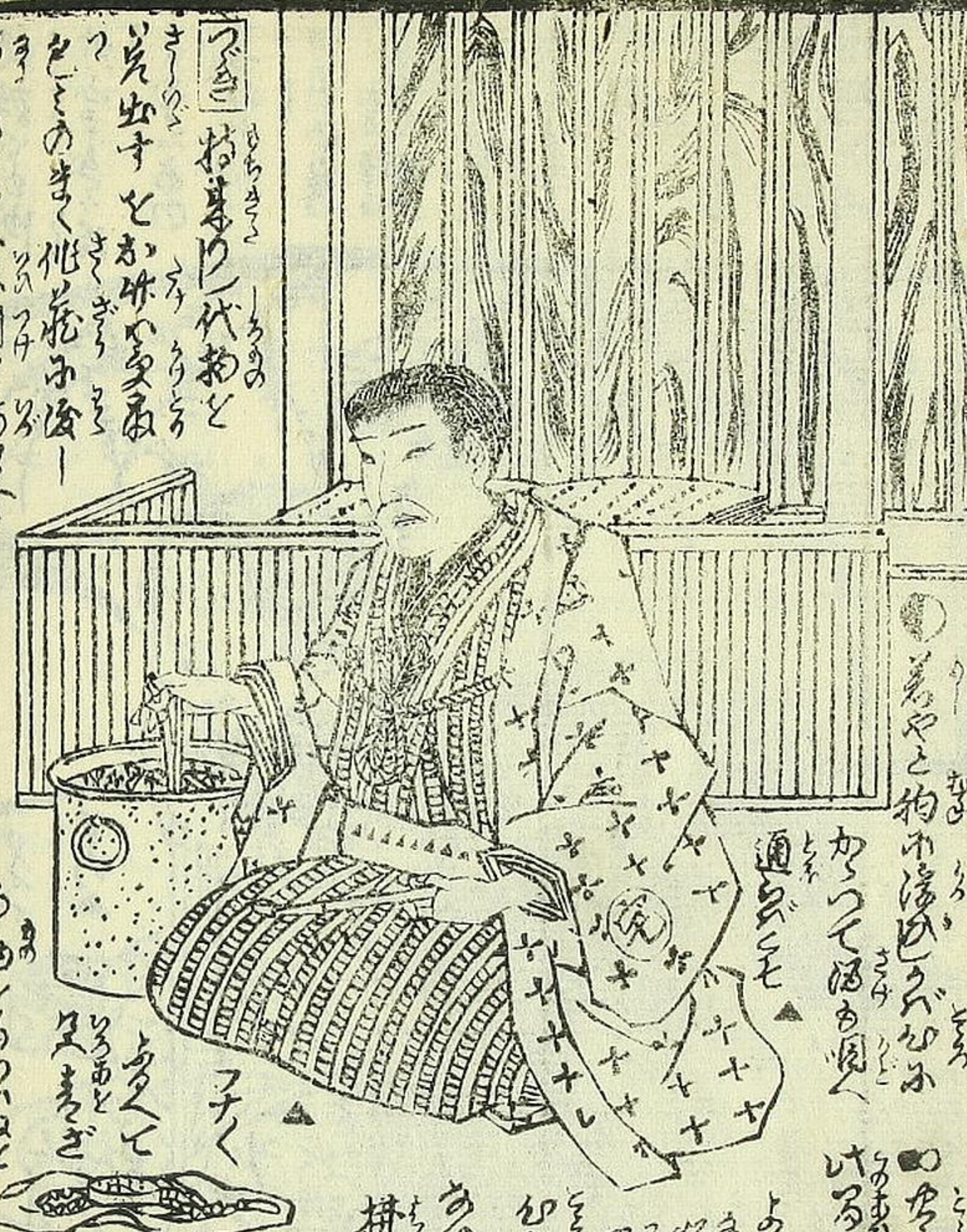
おきのり代物と
見出すとお味も兼ね
たこのまじけ花も海
面はひそくふ付て何れも

おきのり代物と
見出すとお味も兼ね
たこのまじけ花も海
面はひそくふ付て何れも

あつたものいぬと
あつたものいぬと
あつたものいぬと

おきのり代物と
見出すとお味も兼ね
たこのまじけ花も海
面はひそくふ付て何れも

あつたものいぬと
あつたものいぬと
あつたものいぬと



おきのり代物と
見出すとお味も兼ね
たこのまじけ花も海
面はひそくふ付て何れも

あつたものいぬと
あつたものいぬと
あつたものいぬと

おきのり代物と
見出すとお味も兼ね
たこのまじけ花も海
面はひそくふ付て何れも

あつたものいぬと
あつたものいぬと
あつたものいぬと



新刊三

五



おのれは...
 だんご...
 ねど...
 ねど...
 ねど...

おのれは...
 だんご...
 ねど...
 ねど...
 ねど...



おのれは...
 だんご...
 ねど...
 ねど...
 ねど...

おのれは...
 だんご...
 ねど...
 ねど...
 ねど...

ついで

安山

月未

あき

と侍

おれど

そのちる

生後何

とも嘉沙

清身のみか

儀候のふあ

七か白鳥村

あはれん

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

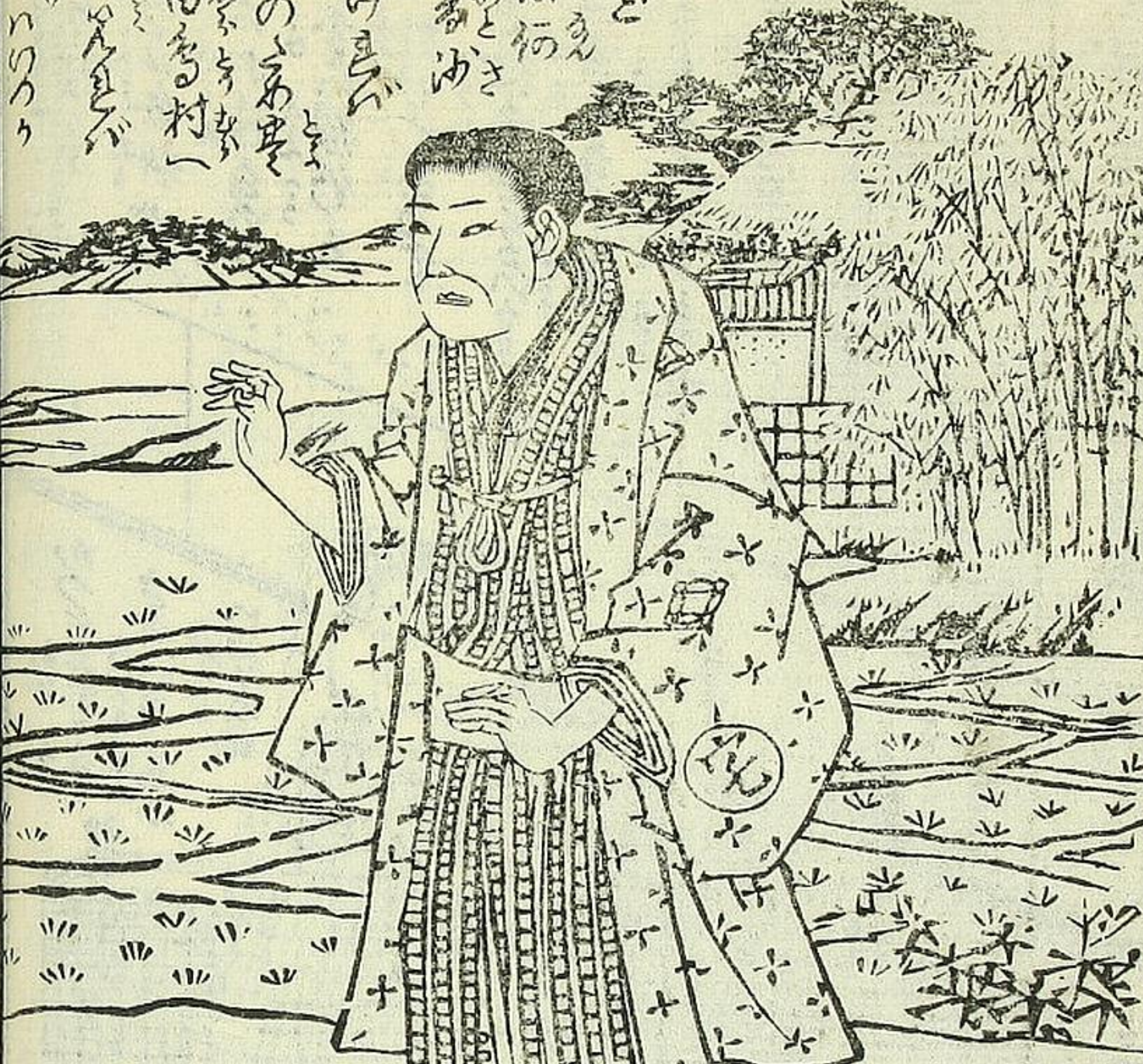
あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ



必り弟を尋ねりに

化流ともいふ五日前

城より回形を折つ

且是夜より弟の首

のち

ておれ

が外へ

後り

まくのいふが初めと

是より尋ねくは長あれ

おの代わりの東よりあ

の母が持帰りとのいふ

さういふ内けが折つて有

さういふを強しとのい

あつた

とあれど

契也

我れ

おれ

おれ

おれ

おれ

おれ

おれ

おれ

おれ



同和と立廻り

明家と成る

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

あふあ

念怒の情小かも晴むらまされ結末の人と

夕暮にひなの端に沈まらるる彼女の積小燈を

うと流るる速下流初め坊而候小なるる落月

夜露を流燈の山風小燈打燈と

小田原と彼に

言ん心来

かの町人

あはせか

とせ七ホ

突あうるは

出はせ提灯の光り小燈を

足踏めかねてふ一天りと燈と

か付知す者七がカラリとあす



今日作落ぬ
のこしとのひと

あや

あの子

あの子

あの子

あの子

あの子

あの子

あの子

あの子

あの子

あの子

あの子

あの子

命之養生言惡鏡 新本 一冊 教訓善惡図解 新本 一冊

清華 名所 五十二除 日一冊 ちと 舟 新本

徳川年代鑑 日一冊 大功記銘傳 八冊

日本 名所 神社佛閣 日一冊 園とて 一冊

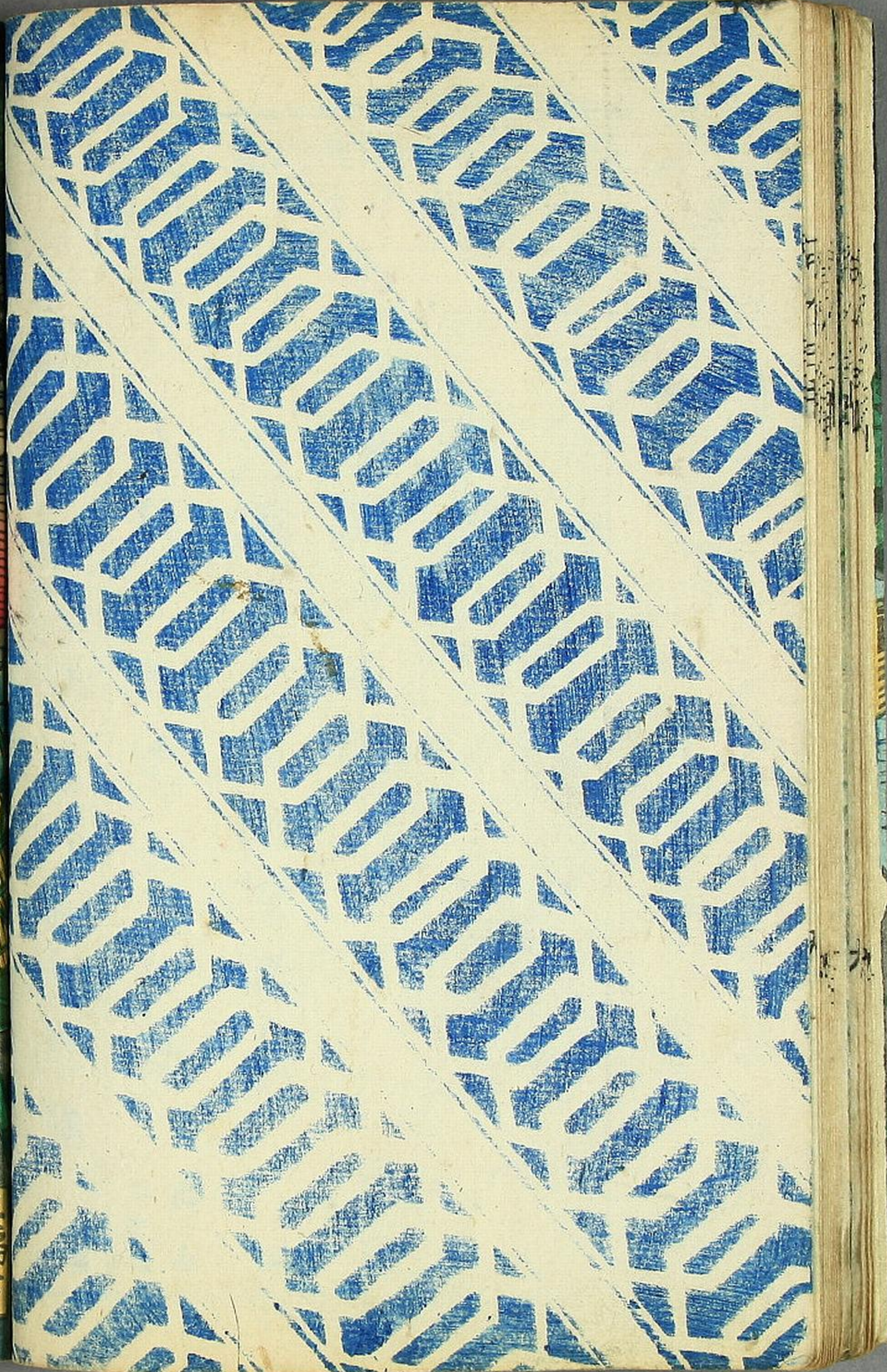
俳優忠臣藏 日一冊 色入小女品

色圖 入 單語圖解 日一冊 魔島紀事

龜 地本 錦繪 問屋 島鮮堂 綱島龜子



三編下

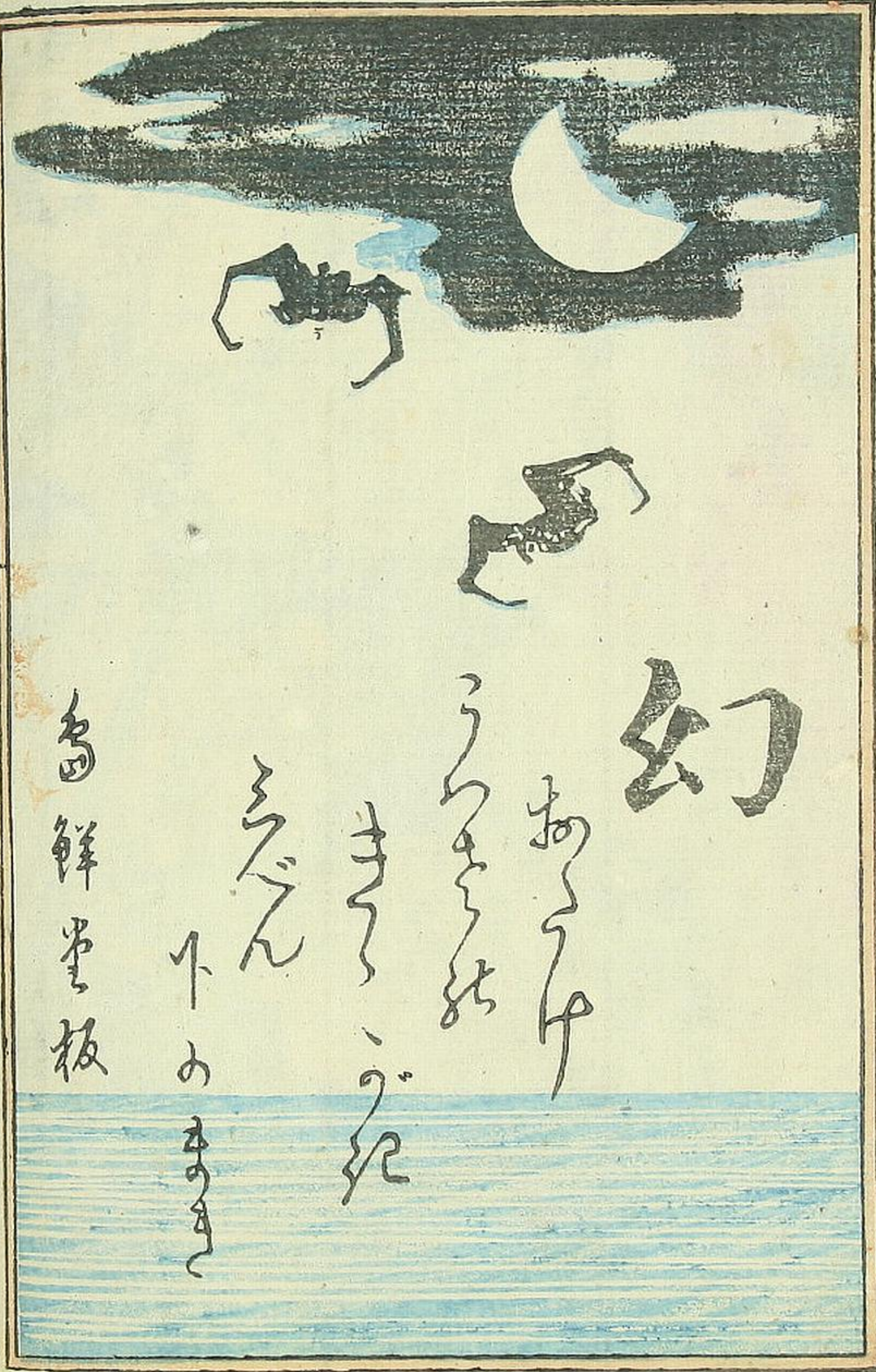




○ 憂い云浦町田宿の外は堂にありて
 程末由途続へ流波ありに舟も流り

が浦漱をらる波の
 相凄くはゆ
 遠寺の初秋
 の待候はる常と
 ちりてゆく橋橋さる
 えん 振千ふあまをうけて
 今更ふ

と
 及本
 東海
 空とも早
 うと
 帯引
 馬
 模糸
 が
 子の



幻

あらし

うらま

まろ

えん

下のま

高鮮巻板

ついでに侍遠くへ一歩あるくは二重
まきまきと毒婦不遠くは時未何とも
あはれのまきまきと命を捨て
実府へお店の由懸思をわり
まきまきと毒婦不遠くは時未何とも



まきまきと毒婦不遠くは時未何とも
あはれのまきまきと命を捨て
実府へお店の由懸思をわり
まきまきと毒婦不遠くは時未何とも

まきまきと毒婦不遠くは時未何とも
あはれのまきまきと命を捨て
実府へお店の由懸思をわり
まきまきと毒婦不遠くは時未何とも



逃らせんを
後ろ
の町人を抱きとめ橋のまの
引去てヤイ愛すらるる又共め
死んで去れがまきまきと毒婦不遠くは時未何とも
まきまきと毒婦不遠くは時未何とも

今までの
と毒婦
まきまきと毒婦不遠くは時未何とも

次へ



ぬいばい
 ぬいばいを力
 なるゆきふれ

ありの巻
 ありの巻

けしん
 命に換る
 ぬいばいに
 と死に
 えより

ぬいばい
 ぬいばい
 ぬいばい
 ぬいばい

物持の吐きかきと武夫が合せておの代物を
 東京へ積送りしるやと知り物めてき方がおかし
 たむらうと事と付しるが公持さまに
 そちが同計と持て送電でもあつた
 うと案下と通るおの始末さん
 事因計由人の物にきるやと
 紙か捨ふこのころとせられた
 命を命と拾ひし上
 茶と多てもおれと武夫
 の形湯と尋ね吐きかきとあつた
 時ハハ何計と武夫おめて思はず
 前ハ何計と武夫



ありの巻
 ありの巻

ありの巻の
 料を免
 させぬ
 とらぬ
 小徳に
 何計に
 小徳に
 とらぬ
 小徳に

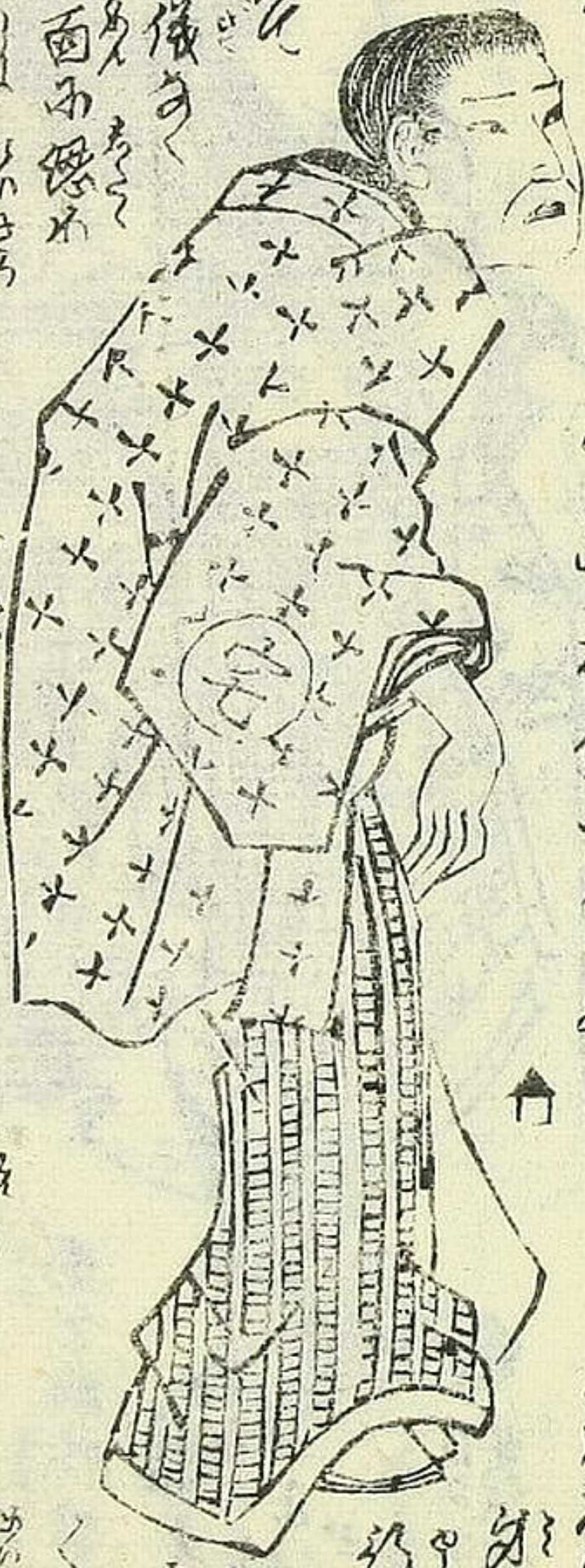
つぎ さらば 看茶
取てある田人が
自筆の紙の
証出を以て
掛合いか
まの只お味か
を付てある



○ 柏原にありては 採茶と

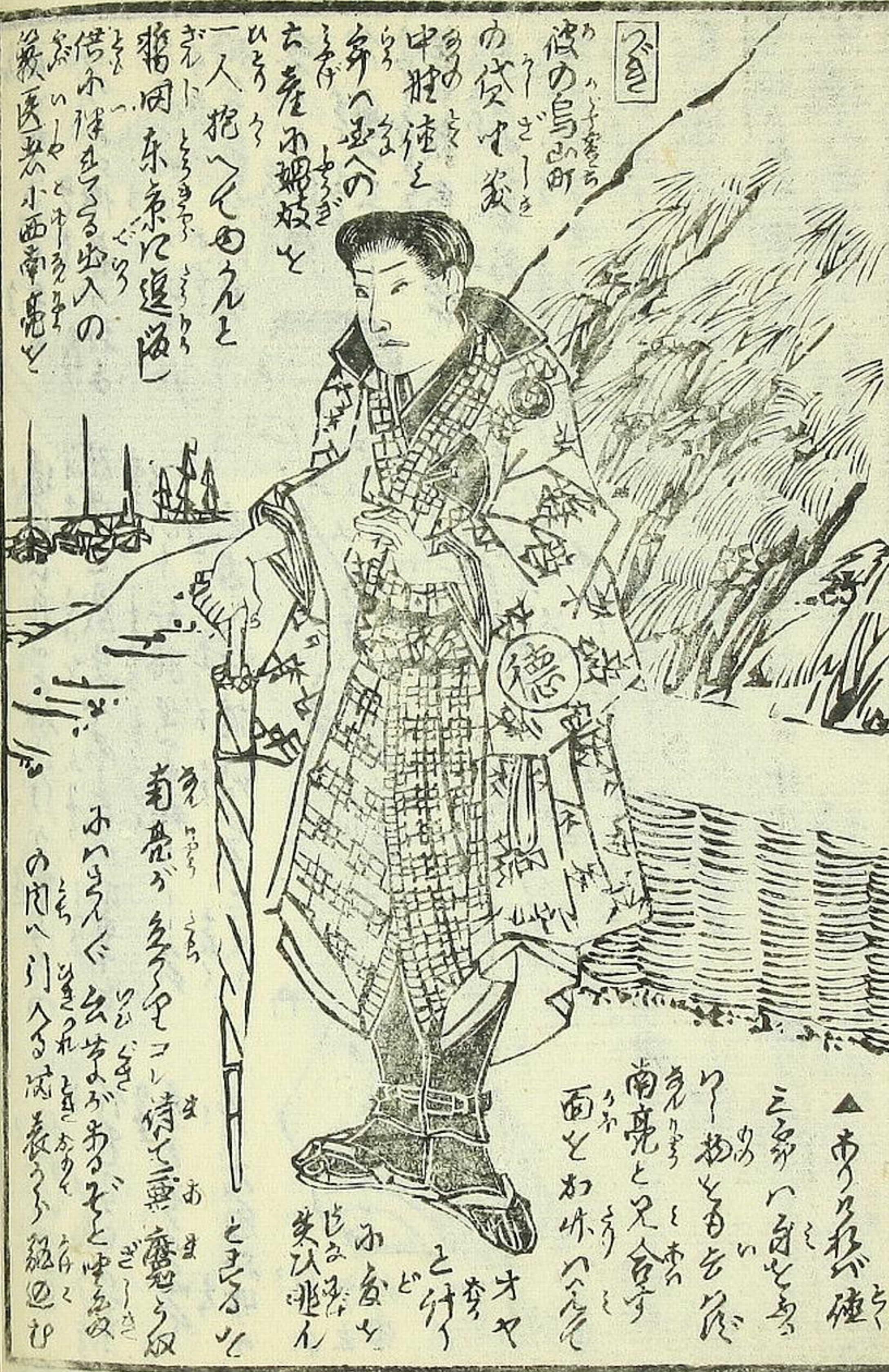
↑ 子規うと
後されーが
「あやふさふと
かみまきわら
羨みどた
さぬのわ
未尋ねは
としか作がたか
あよまに 秋小
あふねと今夏
に 子規の
後と情

海七つちりては 方も
多け共の 惟義が お子
ありとて 田々の ありに
掛合とて 証出
あふも 迷惑
分 累の 立板
要の 難云とて 方
取合ぬ 由 未尋ね
たの 採茶と 出 面 採茶
定を 集う 同 取の 証出
悪一 海へ 一 して 道に 惟義と
唯此 され ね ね ありと 方 後
不 揚 以 あり 申 一 立 して



透けられたと ありが ありの
強要と 武まが 不良の 不業と
仍以 征 跡 あり 由 判り 一 あり
あふ人 七 捕 縛 せん と ます

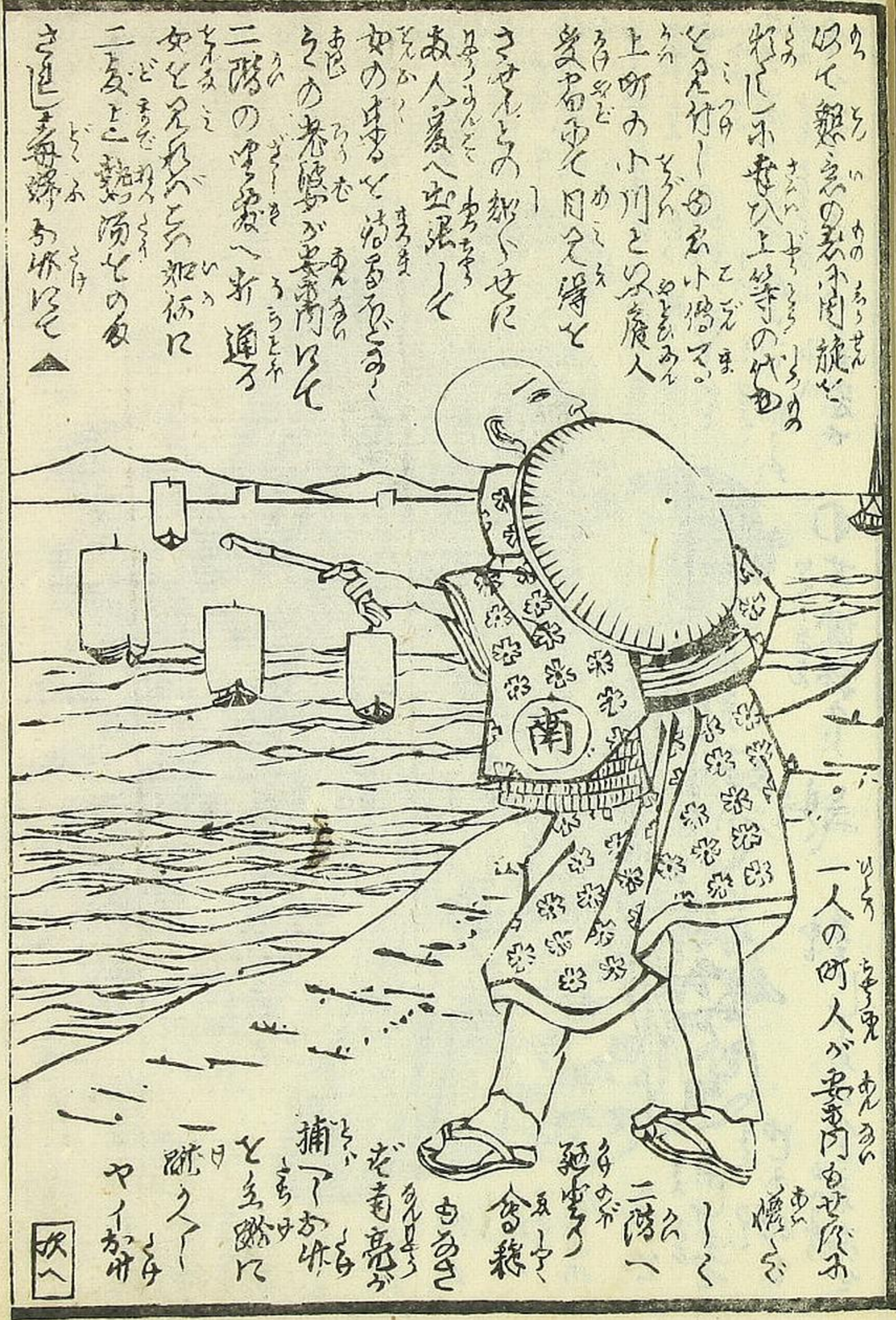
何れも 採茶
後むるや 只 採
茶と せりの あり
あふ ね あり 採
茶
ね 採 あり あり ○ 採 茶
十二年の十一月 熱
海の 陽 採 茶 採 茶
と 採 採 採 採 採



彼の鳥山所
 の貸付後
 中村屋と
 舟へ並への
 去る小堀枝と
 一人抱へてゆくと
 舊田系に還後
 借小堀まうる出入の
 後医者小西常亮と

南亮がまうる中ノ侍と無慮うぬ
 小堀まうる公坊があつた中
 の内へ引合はる長うら紐廻り

▲ありはれ
 三命ハ白と
 何れもを
 南亮と兄合す
 面とわわハ
 オヤ
 と付
 小堀
 美以進ん



以て懇急の表小因旋
 ねに小舟以上等の内
 とは付しゆ小堀ま
 上所小川と小堀人
 受君而て目文得と
 させとの知りせに
 ぬ人へ出退し
 如の表と付るを
 らの者徳が要内
 二階の中へ入道
 女と兄れハ
 二友と二熱湯と
 さ道毒海お休は

一人の何人が要内由せ
 二階一
 倉穂
 由る
 捕アお休
 と去路に
 一階
 ヤイお休



つき 男のあつては...
 あれは...
 男を...
 サア...
 東のは...
 ゆか...
 罵る...
 変つ...
 の...
 下...
 女...
 の...
 命...

挿...
 依...
 休...
 如...
 格...
 の...
 異...
 年...
 逐...
 個...
 と...
 ハ...
 の...
 表...



つき 男のあつては...
 あれは...
 男を...
 サア...
 東のは...
 ゆか...
 罵る...
 変つ...
 の...
 下...
 女...
 の...
 命...

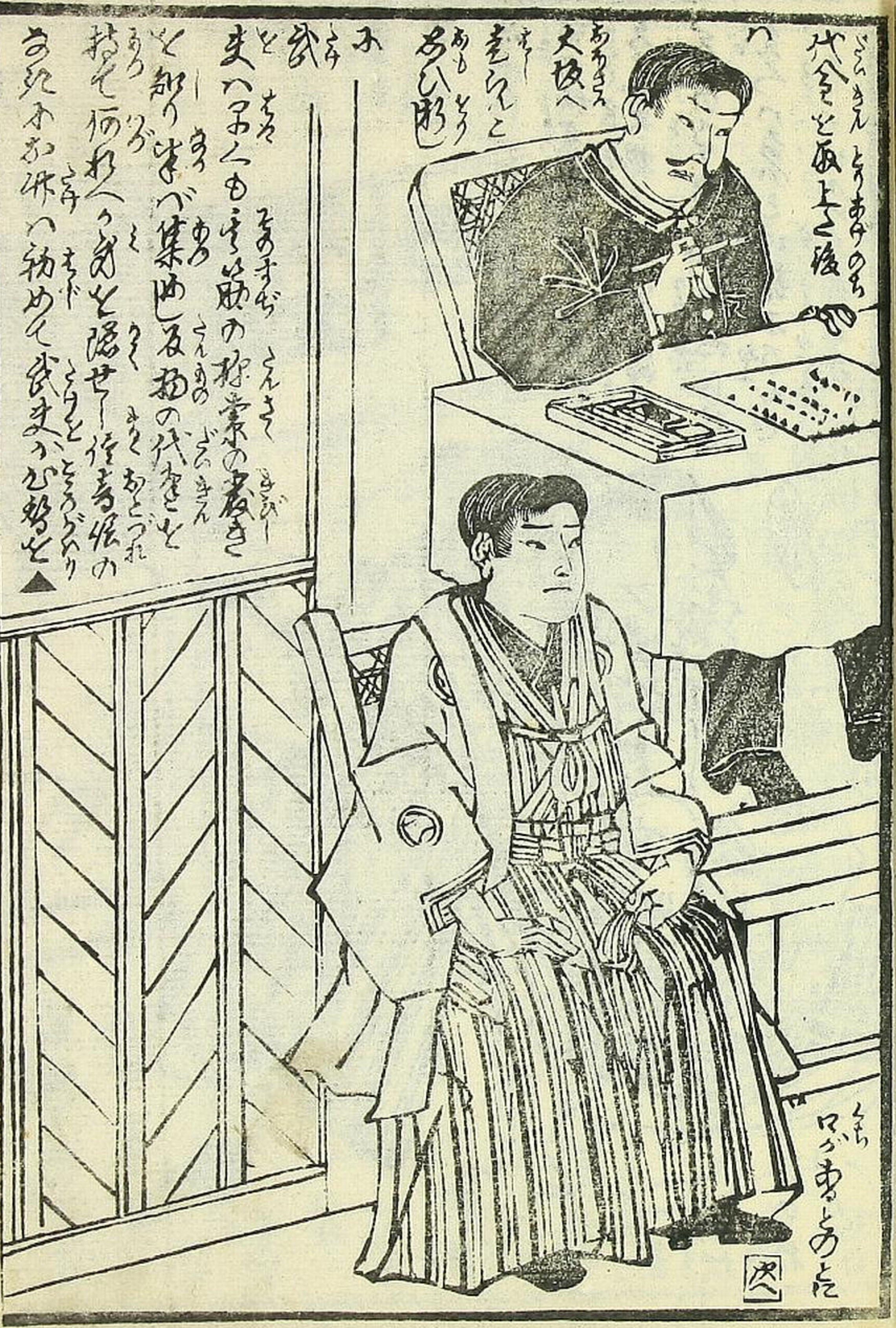
挿...
 依...
 休...
 如...
 格...
 の...
 異...
 年...
 逐...
 個...
 と...
 ハ...
 の...
 表...

海屋(海屋)を七(七)番(番)高くお作(作)が精(精)来(来)
 と有(有)下(下)が波(波)濤(濤)拍(拍)一(一)應(應)會(會)の上(上)退(退)之(之)烟(烟)
 ぶるもあふんとの云(云)は(は)下(下)分(分)異(異)と(と)下(下)
 空(空)まうき人(人)は(は)夕(夕)之(之)報(報)せん(せん)と(と)是(是)
 も亦(亦)急(急)の(の)放(放)り(り)之(之)互(互)為(為)り(り)ぬ
 お(お)休(休)の(の)礼(礼)同(同)前(前)り(り)な
 武(武)末(末)と(と)侍(侍)り(り)歎(歎)き
 西(西)じ(じ)及(及)お(お)と(と)嘉(嘉)菜(菜)
 送(送)る(る)二(二)人(人)一(一)面(面)ふ(ふ)の(の)由(由)
 村(村)と(と)退(退)き(き)出(出)来(来)し(し)て
 別(別)と(と)ふ(ふ)前(前)と(と)取(取)り(り)改(改)ま
 る(る)一(一)人(人)と(と)取(取)り(り)改(改)ま
 夫(夫)孫(孫)の(の)電(電)踏(踏)り(り)度(度)

御(御)今(今)交(交)通(通)め(め)と(と)危(危)き(き)
 の(の)ま(ま)小(小)さ(さ)い(い)様(様)も(も)さ(さ)く(く)な(な)り
 上(上)亦(亦)傷(傷)お(お)と(と)す
 付(付)ね(ね) 旅(旅)が(が) 所(所)生(生)
 田(田)舎(舎)又(又) 入(入)右(右)一(一)面(面)公(公)文(文)
 只(只)今(今)と(と)あ(あ)ら(ら)は(は)
 此(此)道(道)不(不)始(始)は(は)

代(代)金(金)と(と)取(取)上(上)之(之)後(後)
 大(大)換(換)へ
 老(老)い(い)と(と)
 多(多)い(い)形(形)

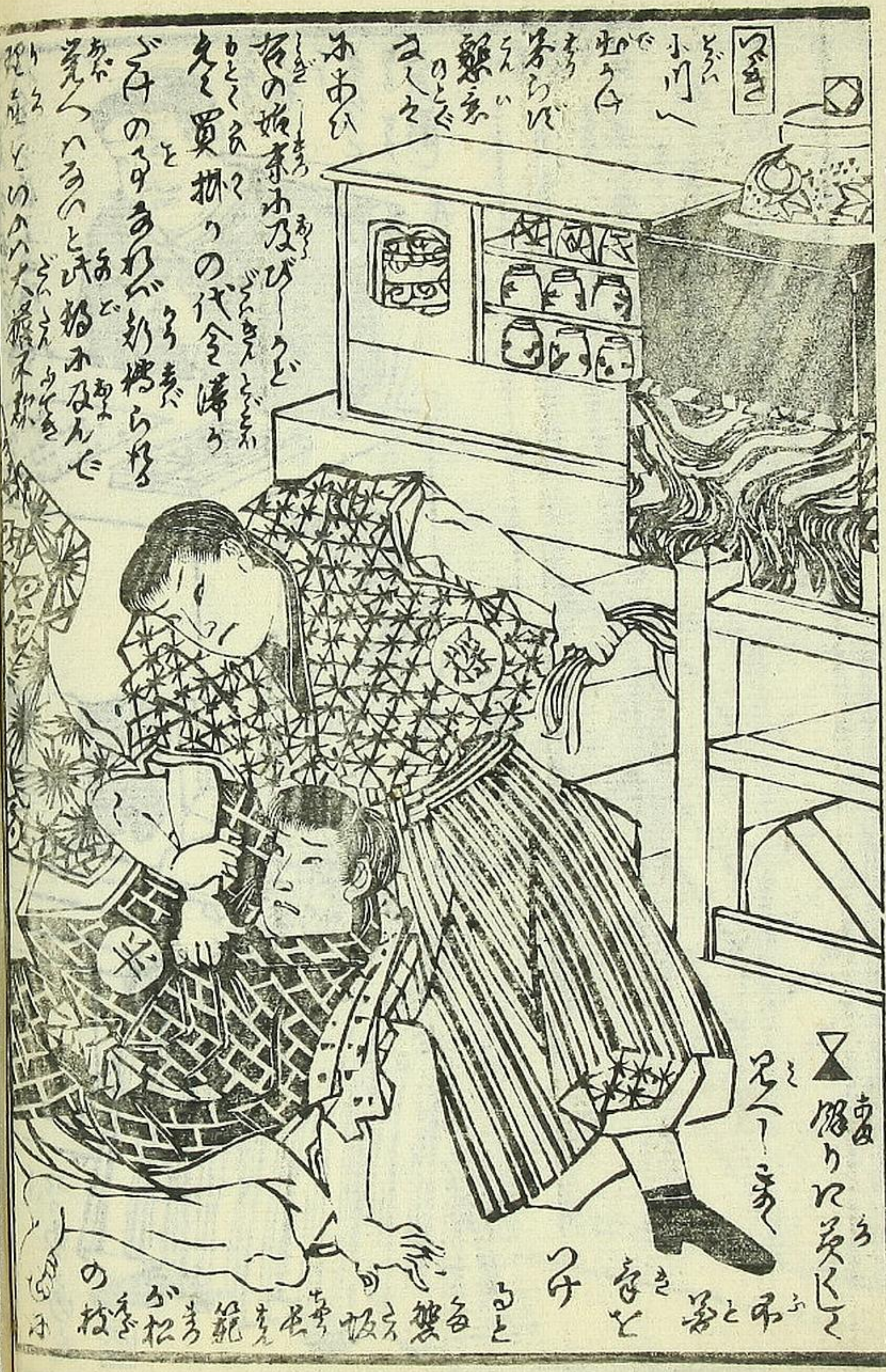
夫(夫)の(の)子(子)も(も)手(手)の(の)筋(筋)の(の)持(持)業(業)の(の)取(取)り(り)
 と(と)部(部)の(の)味(味)は(は)集(集)め(め)及(及)お(お)の(の)代(代)金(金)と(と)
 持(持)て(て)何(何)れ(れ)の(の)身(身)と(と)隠(隠)せ(せ)て(て)後(後)者(者)の(の)
 身(身)死(死)不(不)お(お)休(休)ハ(ハ)初(初)め(め)武(武)末(末)ハ(ハ)公(公)文(文)と(と)





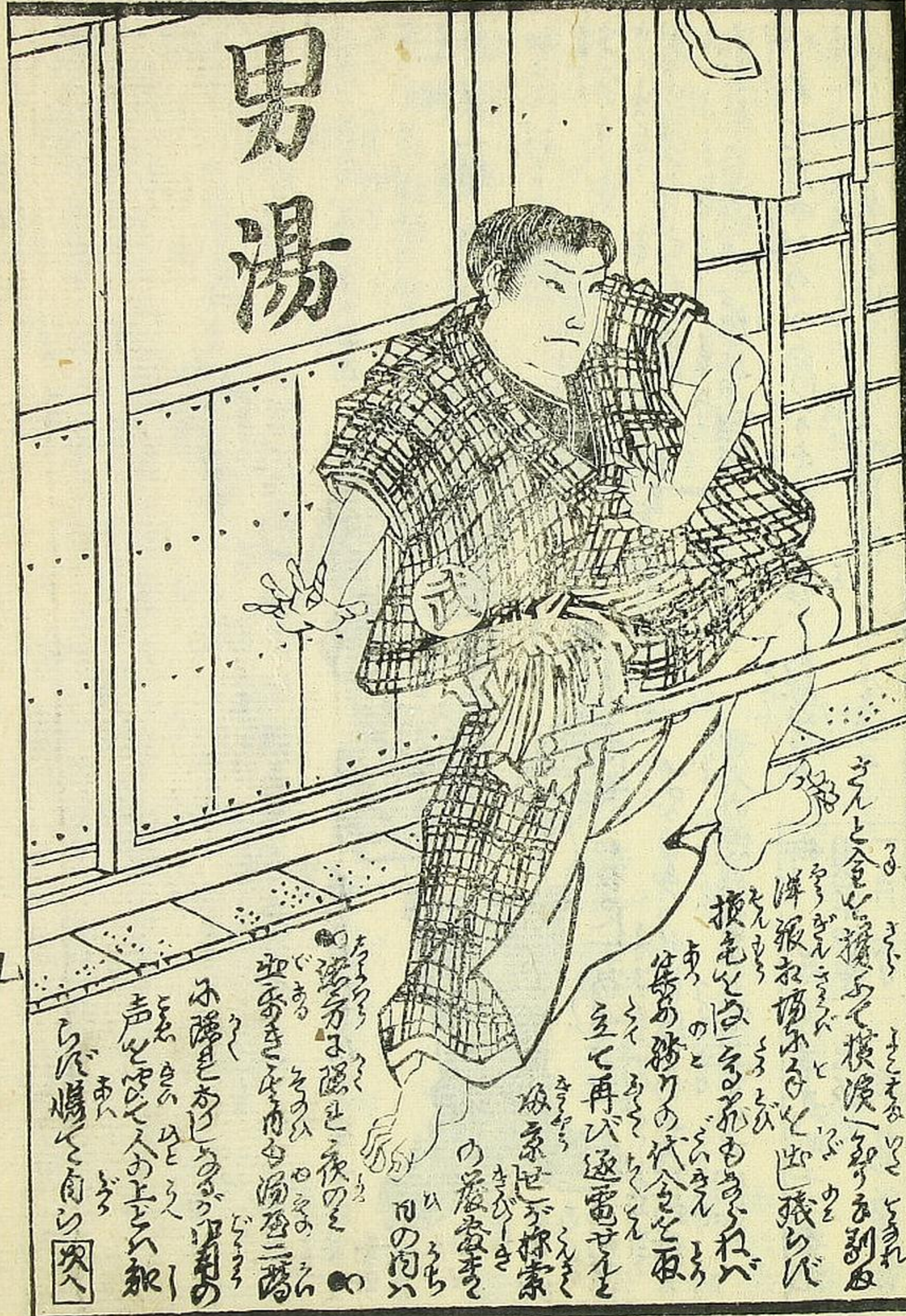
とくくには
 初イ
 あつた
 小捕へんと
 十二月上旬の
 の称索掛りか
 本中での成る
 洗湯へ

ある人
 仲の男の
 骨中の
 掃が
 巡りの巡査を
 次へ



小あひ
 冬の買掛りの代金
 びのりまね
 小門へ
 小あひ
 冬の買掛りの代金
 びのりまね

巡りの巡査を
 次へ



男湯

さんと金に換えて横濱へ行くに別段
 洋紙お坊主の子と出で残れば
 扱毛とはさるおもむねに
 是れお坊主の代金と取
 立て再び返電せよと
 ぬき世が探索
 の足腰をまき
 日の内ハ
 湯方は隠し居候と
 迎ふまに内白湯を三階
 小階におじりあつたお坊主の
 声とて入の上より
 らん湯と自ら入



つと 伴は着りて入る張るまじ
 形も自ら二階一階ゆき不意に
 声とて取て押しお前をと呼
 りる声とてつし濁の方へ
 登降してありし士族仲
 の男が懐く二階と
 駆け下り表へ逃出さ
 さんとさる

○ 伏の初めさるは探索が
 捕扱せしめのと巡査が

てかゝる捕しに探索
 官の戒めらるるに引いて知て
 来り巡査の捕し男とて
 逃げぬ二階ありとて
 さんと共にお拘
 りて
 置島
 らん



まがらくあしけ

幻阿休

吟うた張はり写か書き

三編

当解字样

芳川美清園 園古起泉鏡

楼高庭経園

